

Revue japonaise de didactique du français  
Vol. 3, n° 2 (2008) Etudes francophones  
pp. 142-148

## 生物学的多様性から見た言語多様性化の核としてのフランス語 (Le français comme le noyau de la diversification des langues, un propos biologique)

佐藤直樹 SATO Naoki

### Résumé

*La langue française avait fait une contribution importante aux archives des sciences modernes, mais l'anglais est la seule langue privilégiée des chercheurs contemporains pour la publication et pour la présentation des découvertes scientifiques. La situation est pareille dans tous les domaines d'échanges informatiques, notamment dans la communication par l'internet. Si le rôle de la langue était uniquement d'assurer un moyen de communication ou de description de faits objectifs, tous les êtres humains du globe pourraient utiliser une seule langue. On croit que c'est ce rôle qui est tenu par l'anglais. Pourtant nous pensons que la langue est quelque chose de plus, parce que toutes les langues ne sont pas les mêmes. Les Japonais aussi refusent l'alphabet latin pour l'écriture japonaise, parce que les kanji et kana s'imposent sur toute leur culture. Il semble que chaque discours possède une langue et des lettres qui lui sont le mieux adaptées. La diversité linguistique tire son origine de la pluralité humaine, dont la diversité des êtres vivants pourrait servir de mo-*

dèle. Dans l'histoire de l'évolution de la vie, les êtres vivants se sont continuellement diversifiés. Dans cette diversité, se trouvaient les prédécesseurs des organismes qui domineraient pendant l'ère suivante. C'est ainsi que la diversité est à l'origine de la continuité et du dynamisme de la vie. La pluralité linguistique est ainsi la base essentielle de l'épanouissement de la civilisation humaine.

Avons-nous besoin du français en plus de l'anglais comme langue de communication internationale ? Malgré un approfondissement potentiel de la compréhension mutuelle par l'apprentissage d'une langue supplémentaire, on risque de rencontrer à nouveau une autre difficulté profonde de la compréhension internationale. Il faudra faire preuve de patience pour enlever l'obstacle qui apparaît à mesure que l'on progresse.

### Mots clefs

diversité biologique, diversité linguistique, communication internationale, compréhension mutuelle

### 1 はじめに：「フラ語とる馬鹿」問題

この標題の言葉をご存じだろうか。私が勤務する東京大学教養学部では当たり前のように流布している言葉である。要は、フランス語は発音が難しく、語形変化もたくさんあるので、勉強が大変だからやめておこうということで、このくだらない噂のためにフランス語を履修する学生が減っている。これを愁うる記事が、フランス語部の松浦久輝先生により学部報に掲載された。私もこれは深刻な事態だと思って、直ちに「がんばれエール」を松浦先生に送った。

ちなみにフランス語は、語尾が母音で終わるので、日本人には発音が容易である。métro, boulot, dodo (フランス人のサラリーマンの日常を揶揄したことばで、それぞれ、地下鉄、仕事、睡眠をさす。仕事以外の時間は通勤と睡眠という生活のこと)などの俗語はみな母音で終わる。英語のような強弱のはっきりした抑揚もあまりない。単語が系統立っていて、動詞、名詞、形容詞、副詞が同系統の言葉で統一されていて覚えやすい。さらに、フランス語の単語はラテン語と関係がつくので、学術用語の理解が非常に楽になる。動詞の変化と名詞の性も現実にも問題になることは多くない。大学で勉強するならフランス語以上に易しくて役に立つ言葉はないと思うのだが。

本稿では、自然科学におけるフランス語の必要性について述べ、さらに、生物学の立場から、生物多様性の表れとしての言語や文化の多様性の重要性を論ずる。最後に、言語履修による国際コミュニケーションと国際相互理解について述べ、多言語教育の提言をまとめた。

### 2 自然科学におけるフランス語の役割

自然科学における共通言語が英語であることには疑いがない。人事選考などでは、英語で書かれたもの以外、業績とは見なされない。この点は文科系とは全く異なる点

である。その意味では、フランス語を使う必要は全くないのであるが、果たしてそうだろうか。

## 2.1 自然科学を記述するフランス語

今、フランス語やフランスというと、フランス文学、フランス料理、ファッション、シャンソン、ブランド品などが思い浮かぶ。人権について世界史や公民でならったとしても、フランスのイメージにはつながらない。フランスが人権だけについてリーダーだったというわけではなく、17—19世紀のフランス全盛時代には、フランスがヨーロッパ文化の中心であって、文化全体がフランス語で語られていたと考えればよい。つまり当時のフランスは、今のアメリカのような存在だったわけである。従って、上にあげた現代のフランス文明で話題になるものは、畢竟、フランス全盛時代の遺産ということだろう。この意味では、自然科学もまた、全盛期フランス文化の所産である。もちろんドイツやイギリスやイタリアの科学も重要な役割を果たしたから、これらの合作といったらよいかも。すでにフランスと特に関連づけられて考えられなくなった「普通の自然科学」のかなりの部分が、フランス語で書かれた著作によって構築されたことを確認しておこう。インターネット辞書である Wikipedia の「自然科学法則」(2007) からフランス人科学者名を抜き出してみる。括弧内の専門分野は著者が追加した。

アンペールの法則 (電磁気学), シャルルの法則 (熱力学), パスカルの原理 (流体力学: パスカルの三角形やパスカルの定理は数学), フェルマーの原理 (光学: フェルマーの最終定理は数学), ラウールの法則 (熱力学), リウヴィルの定理 (解析学, 解析力学), ルシャトリエの原理 (熱力学)

この他にも、デカルト (数学), ラボワジエ (化学), ラマルク (生物学), パストゥール (生物学), カルノー (熱力学), マリー・キュリー (ポーランド出身, 物理学, 化学), ルイ・ド・プロイ (物理学), などなど枚挙にいとまがない。

まとめると、自然科学の礎を築いた言説にはフランス語文献が多数ある。もちろんドイツ語や英語やイタリア語もあり、さらにそれ以上にラテン語の文献がある。フランス語はラテン語への入り口としても最適である。

## 2.2 歴史的文献の理解とフランス語

このようなわけで、今のまま理科系の学生がフランス語を勉強しないでいくと、50年後には、日本の自然科学者は誰もフランス語が読めなくなる。それは、現代科学のルーツを失うことに等しい。最先端の自然科学と科学史を結びつけることはすでに容易ではないが、きわめて困難になってしまう。その場合、フランス人はフランスの古い文献を読むことができるし、欧米の多くの知識人 (自然科学系も含め) もフランス語が読める。日本では、フランス語やドイツ語で書かれた自然科学の歴史的な重要文献を読める人がいなくなるとすると、この分野は現代科学と完全に切り離されてしまう。

一例を挙げてみよう。皆さんはイチョウという樹木をご存じだろうか。秋に銀杏が実る樹木である。このイチョウは、花粉からべん毛を持った精子が出てきて胚珠と受精

するため、精子をもつのも高等な植物である。このことを最初に示したのは、東京大学植物園助手の平瀬作五郎という人で、1896年のことである (短い解説は、東京大学生命科学教科書編集委員会 (2007) を参照)。これは日本の生物学が世界的大発見をした最初の偉業として大きな意味がある。平瀬はその成果をドイツの学術誌 (Hirase, 1897) が、さらに詳細な論文を、東京帝国大学理学部紀要にフランス語で発表した (Hirase, 1898)。たった100年前の学術成果でもドイツ語とフランス語を解さなければ、世界に誇る発見の歴史を追認することは難しいのである。

## 2.3 フランスで研究するにはフランス語は必須科目か?

私は1989年に半年ほど、グルノーブルの国立研究所 Centre d'Énergie Atomique/Grenoble で客員研究員として過ごした。研究室の習慣はどこでも同じで、外国人とは英語で話すとしても、普段の会話はもちろんその国の言葉、つまり日本なら日本語、フランスならフランス語である。フランスの研究室でも事務員や技術補佐員はあまり英語ができない。実際に実験を手伝ってもらう技術補佐員とのコミュニケーションは特に重要である。当然、フランス語でコミュニケーションができることが有利である。

ちなみに、町中の生活ではフランス語などあまり必要ない。私の持論であるが、物品の購入では、欲しいものと代価がはつきりしさえすれば、言葉など要らないからである。言葉が必要なのは、相手が欲していないことをこちらが要求する場合である。これは日本語でも難しいが、フランス語ではもっと難しい。フランス語がわかった方がよい別の場面は、危険が迫っている場合や普通でないことが起きている場合である。列車の遅れ、道路の閉鎖など。この場合、誰かが言っている言葉を聞いて、全部わからなくてもとにかく異常があることを把握する必要がある。

## 3 生物の多様性、人類の多様性、文化・言語の多様性と国際相互理解

ここで生物学の立場から、多様性について述べたい。

言語を意志疎通や言説の手段として考えるだけならば、世界中の人間が同じ言語を使えばよいわけである。でもそんなことはあり得ない。文化や言語の多様性は、それぞれの文化や言語の担い手集団にとって、自己の存在理由である。人類の多様性自体疑いようのない現実であり、それは、生物の多様性の必然的結果である。生命進化の過程では、生物は常に多様化してきた。この多様性の中にこそ、次の時代の覇者が隠れていたものであり、同時にほとんどの種は絶滅したのである。たとえば、恐竜全盛期に細々と生きていた哺乳類があつてこそ、恐竜絶滅後の哺乳類の繁栄ひいては人類の繁栄があるわけである。昆虫でも魚でもさらに寄生虫のようなものでも、また藻類でも植物でも、常に新しい多様性を生み出すことによって今日まで生き延びてきているのである。言い換えれば、生命の誕生以来、多様性は生命の連続性の源泉であり続けたのである。

それは人類の歴史でもいえる。「驕れる者久しからず」とは、すべての世界の覇者に当てはまる言葉で、新しい時代を作るのは、いつも前の時代には日の当たらなかった人々である。そして再び話を言語に戻すならば、言語の多様性は大切である。言語の背後にある文化、そして話し手である民族の多様性につながる。多様性こそが人類

の最大の宝である。

#### 4 言語学習とコミュニケーション, 相互理解

反問してみよう。それぞれの人々がそれぞれの言葉を使うことがどうして大切で、なぜ共通語ではいけないのか、共通語では相互理解はできないのだろうか。日本人が英語の次にフランス語を学ぶということの意義は何だろうか。相互理解とは何なのだろうか。コミュニケーションと相互理解を考えてみたい。

##### 4.1 フランス語によるフランス語学習のメリット

私は生物学を専門としているが、フランス語を15年ほど勉強した。私は理科生だったので、教養学部ではドイツ語を第2外国語としていて、大学院受験でも第2はドイツ語だった。その他、ロシア語、イタリア語なども少しずつ学んだ。大学院入試が終わった理学部4年生の10月から、お茶の水のアテネフランセに入門科から通い始め、最初の安田悦子先生を除いてすべてフランス人の先生に教わった。さらに、後には、ラテン語、ギリシャ語なども学んだ。私のモチベーションとしては、自然科学や哲学の原典を読みたいという気持ちがあり、このような選択となったのである。

フランス語を学んでいて、普通の大学での語学教育とは全く違うと思ったのが、フランス人講師から教わるという点であった。発音などもさることながら、時々想像もしない本音発音に驚かされ、言葉はその言葉で勉強しなければと思った。フランス人のいうことがすべて納得いくことではなく、植民地や他国との戦争に関わる事柄では、ただただ驚くのみであった。ポジティブな驚きとしては、人権意識、論理性などがある。「Ce qui n'est pas clair n'est pas français.」(「明晰でないものはフランス語ではない」)<sup>1</sup>ということを知り、何となくロマンチックなフランスのイメージとは全く異なることがわかった。何でも論理で考えるという、日本の他の教育(自然科学も含めて)では聞いたことのない発想であった。アテネフランセの上級クラスでは、フランス文学の解釈などの講義が多くなったが、一語一語の意味とそれが指すもの、受けるものなどの関係を非常に明確に説明する点は、日本の国語教育にはない論理的思考であった。日本の国語教育にも是非取り入れてもらいたい点である。

##### 4.2 コミュニケーションから相互理解への難しさ

フランス語を学ぶと、英語だけの場合に比べ、フランス人とのコミュニケーションに幅と奥行が出てくる。では、それによってフランス人の心がわかるのだろうか。逆に日本のことをわかってもらえるのだろうか。フランス語で意見を発信すると、日本に対するフランス人の考え方が変わるだろうか。日米関係だけの外交の枠組みを超えて、多国間の信頼関係を本当に築くことができるのだろうか。

あえて逆のことを言わせてもらうならば、日本人が思うほどには、フランス人が日本のことを思ってくれているわけではないことも認識しておかなければならない。本音というのは母国語でないと出てきにくい。だからフランス語で会話しているとフラ

<sup>1</sup> これは元来、Antoine de Rivarol がヨーロッパの普遍的言語としてのフランス語の特権性を論じた懸賞論文において、1784年に書いた言葉である。詳しい分析の紹介は一橋大学付属図書館企画展示「EUの公用語」ウェブページ(2007)に書かれている。

ンス人の本音に突き当たることがたまにある。ある人は、「日本はどうして漢字を使うのか、全部ローマ字にすれば、外国人にも発音だけでもできて、日本で暮らすときには安心する」と言っていた。別の人の話。「日本語は単純で、動詞の人称変化や時制の変化など複雑な文法の規則はない。だから習得はたぶん易しいだろう。」どちらも、決して日本をけなそうと思ってなされた表現ではないだけに、これらには驚かされる<sup>2</sup>。フランスは人権の国のはずなのだが……。しかしまた同じ人が、「日本が戦争をしたのはアメリカに追い込まれたからだ」とも発言しているのを聞くと、日米以外の第三者の存在の重要性にも気づく。大事なことは、会話と相互理解は別問題だということである。しかし、相互理解の本当の難しさは、言葉が通じなければ実感できない。相手のことを理解する難しさは、お互い様であろう。その場合、私たちが本当に私たちの思うことを発信する方法は難しい。なぜなら、相手が日本語を理解してくれることには期待できないからである。英語を使っている限り、アメリカのいうなりにしかならない可能性は高い(英語ができる総理大臣を思い浮かべてみよう)。もう一つの言語が加わると、観点が3つになり、相対的な考え方ができるし、徒党を組むことで力にもなる。いづれにしても、相互理解が難しいと理解すること自体が、多言語修得の成果なのかもしれない。大切なことは、相手にも同じ認識を持ってもらうことで、つまりどうやって相互理解につながる情報発信をするかである。

##### 4.3 日本のパソコンはフランス語が嫌い?

フランス語で情報発信するのがフランス語履修の目的とした場合、その手段も重要である。パソコンでフランス語の文章を書くとき、普通の日本語版のOSを使うと、フランス語の入力はなかなか面倒である。ウィンドウズの場合、国ごとにOSが異なり、フランス語の文字を入力するには特別なメニューをだすか、それをショートカットに割り付けなければならない。マックなら、OSそのものは完全に国際対応なので、入力変換の部分でアクサンの入力をするのは造作もない。しかし、ワードを使っていると、スペルチェックではいちいちフランス語を指定しなければならず、まだ十分とはいえない。コンピュータは英語ですべての開発が進められるため、日本語に対応するとドイツ語やフランス語への対応が悪くなる。ドイツやフランスから来たメールは文字化けして、見たことのない変な漢字になってしまう。改善の余地はいくらもある。

#### 5 まとめ: 多言語教育のすすめ

現在の語学教育は英語に偏りすぎていて、英語圏以外の国に行ったら、完全に手上げである。昨年、フィンランドに行ったが、町の中に書かれているフィンランド語

<sup>2</sup> ちなみにこのことをシンポジウムで述べたあと、フランス大使館のある方から、「この発言をしたのは誰か」と質された。私の発言の意図は、悪意がなくてもこうした本音が出てしまうという指摘であって、発言者に抗議するつもりではなかったのだが、フランス人の発想はきわめて論理的で、けしからん発言をした者に抗議するつもりだったらしい。日本人がフランス語を話すときは、フランスの心をわかろうとするが、フランス人は日本語を使う時にも心はフランス人のままのようである。相互理解の難しさを重ねて確認する結果となった。

の文字列は、何のことやらわからなかった。しかし、同時に書いてあるスウェーデン語は、ドイツ語と似ているところがあるため、町の中のいろいろな表示の意味は想像することができた。フランス人の第一外国語はドイツ語であったが、次第に英語になっている。アメリカ人やイギリス人は概して外国語を勉強しないが、やるとするとフランス語を学ぶと聞いている。

日本では中国語ブームである。私が教える理科の学生でも中国語履修者は多い。聞いてみると文字がわかることが大きな決め手のようである。経済関係緊密化を受けて中国との交流を盛んにすることも重要である。だから、第一外国語は英語で、第二は中国語というのは確かに理にかなっている。しかし、ヨーロッパの言語はまだ捨てがたい。自然科学の原典を読むという見地と実際にヨーロッパの国について共同研究するという実用面を考えたとき、私の薦めは、フランス語に限らず、ドイツ語、イタリア語などいくつかのヨーロッパ言語をセットにして勉強することである。最低限、綴りを読めることと、主な単語を知っておくことで、生活には便利になる。ロシア語でも綴りが読めると、意味が想像できる単語は多い。数字や時間の言い方も覚えたい。文法はどれも日本語に比べれば比較的似ているので、なんとかマスターできるだろう。現在、東京大学では、理科系の学生が教養学部で学ぶ第二外国語は1年間だけになった。他大学も同様の傾向だと思う。理科系の学生にとっては、ますます外国語が遠ざかっていく。できることなら、自由に勉強する機会だけでも確保できるとよいと思う。謝辞 要旨の仏文校閲をして下さった LIN, Waka さんに感謝申し上げます。

#### 参考文献

- Hirase, S. (1897), « Untersuchungen über das Verhalten des Pollens von *Ginkgo biloba* », *Botanisches Centralblatt*, 69, pp. 33-35.
- Hirase, S. (1898), « Études sur la Fécondation et l'Embryogénie du *Ginkgo biloba* », *J. Coll. Sci. Imper. Univ. Tokyo*, 12, pp. 103-149.
- 一橋大学付属図書館企画展示「EUの公用語」ウェブページ <<http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/eu-lang/clair.html>> 2007年7月15日.
- 東京大学生命科学教科書編集委員会編 (2007) 『理系総合のための生命科学』, 東京: 羊土社, p 31.
- Wikipedia「自然科学の法則」 <<http://ja.wikipedia.org/wiki/Category:自然科学の法則>> 2007年7月15日.

(東京大学)